

初折裏第十一

疫なき世共に叶えむ寄り添はむ

妙子 雑

初折裏第十二 逝きしみたまへ甘茶供へむ

ヨシ子 春 【述懐 釈教】

まだまだ世界中に災いしている疫病 COVID-19 で多くの人が亡くなり終息の兆しが見えませんが、「疫なき世」を願いつつも長引く緊急事態の中で人は疲れ苛立ち、ついつい同調圧力に与ってしまったりします。こんな時だからこそ、不幸にして亡くなられた人に「寄り添う」べく甘茶を供えましょう、とは何と心優しい呼びかけでありますことか!!

お釈迦様のお誕生を祝う灌仏会（四月八日）で釈迦像に甘茶をかけます。甘茶には「良い政治が行なわれると世は平和となり甘露がふる」との中国の古くからの言い伝えがあります。いま世界は洋の東西いずこも政治が大変な状況にあります。どうか良き政局となり、疫病もなき世となり、人々の上にあまねく甘露の降り注ぐ日の近からんことを。

さて次句は花の座です。勿論春です。障りますのは夜分、述懐で大して問題となるようなものはありません。奮ってご投稿くださいませ。

（次点句）

季移れども春まだ浅き

かおる 春

今年の節分は二月二日でした。地球の巡りの関係で一二年振りのことだそうです。暦の上ではまだまだ寒い日が続きますが春はもうすぐそこです。冬が来れば必ず春もやって来ます。「疫なき世」もやがて訪れます。もうしばらく辛抱しましょう。

枯野うるほふ温かき雨

敦子 春 【降物】

COVID-19 禍を枯野に例えるとは何たる巧者。この災難を乗り越えるにはワクチンや効果的な療法も期待されますがまずは三密を避け、手洗い、マスクでがんばりましょう。温かい春の雨が大地を潤し、やがて枯野が新たな緑野となるように「疫なき世」以後の世界が豊かな緑の大地になるべく豊かな生き方を模索しましょう。

行くてはるかに陽炎ひてをり

東三子 春 【簞物】

「疫なき世」に至るにはまだまだ時間がかかりそうですね。千里の道も一歩からと言います。そうです。はるか彼方に、はつきりとした姿形とはなっていないかもしれませんが明るいものが見えてきているようです。陽炎が揺れています。暖かい春の日差しの下に。

（講評）

密を避けつつ踊る蜜蜂

美桜 春 【動物】

啓蟄には少し早いです、三寒四温で暖かい日もあります。そんな時、思いもかけず羽虫

が飛び回っていて驚くことがあります。土手に菜の花が咲き始めましたから蜜蜂もそろそろ飛び始めているでしょうか。花の周りも巣箱の出入り口も密なるを避けるのは蜂の習性としてあるかもしれませんね。自然界の秩序は驚くべきものがあります。疫病の蔓延は自然の摂理を人間が壊したからかもしれません。蜜蜂が密を避けつつ蜜を集める踊るように。

僕らの行方にほら桜東風

彩琴 春 【植物】

日本のみならず世界中の人々が COVID-19 の蔓延に困惑しております。学習環境が変わってしまった学生さんは勿論その例外ではないでしょう。

けれど、若者は現在政治の中枢にいる偉いと言われている人たちよりはるか抜きに出て「**己**」を使いこなせます。求めればモノログである読書環境にも問題はありませぬ。「僕らの行方」にほら東風ならぬ暖かい。「桜吹雪」をもたらす風が吹いています。「疫なき世」は必ず叶えられますとの若者の発言に我々大人は励まされます。

思ひをつなぐこの細糸は

美乃里 雑

声も力も一人では弱くても、繋ぎ合わせれば大きくも強くもなります。「細糸」ではあるけれど思いを一つにして「疫なき世」が叶うべく希望をつないでいきましょう。との若者からのメッセージと受け止めました。ありがとうございます。大人も寄り添い手をつなぎ合いきましょう。

はつかながらも土は蠢く

由希子 雑

ワクチンの開発が進み「疫なき世」への動きを「はをはつかながらも」見ることが出来ます。「土」つまり地球全体が、言い換えれば世界全体が動いているとの意に取りました。

この連歌は半世吉で残り三句しかありません。次句十三は花の定座でありますのでここは春を詠んで頂きたいところでした。

霞たなびく美しき村

千嘉子 春 【簞物】

人知は捨てたものではありません。必ずや禍々しきを乗り越え、どこも今にもまして美しき村となって甦るでしょう。との確信をもって前に進みますよう。

孫が言い張る感染手洗い

年幸 雑 【時事句】

学校や幼稚園、保育園では COVID-19 感染防止に手洗いは徹底していますね。外出から帰ってついうっかりしていますと「手洗いは!!」と孫に咎められるほほえましい情景ですこと。

三蜜を避け、マスク、手洗いの三原則を守り「疫なき世」が叶えられますことを。

邨びとつなぐ愛の隧道

敏江 雑

隔たれた山村と山村の間にトンネルが出来、互いに交流が出来るようになる。まさに「愛の隧道」なのです。とても奥深い思いの込められた句ですね。

人は知らない相手、対象には恐怖や嫌悪を抱きがちです。けれど相手を或いは物事を理解すれば偏見や差別がなくなり、互いに愛し合える関係性が生まれてきます。偏見や無知という障害物を穿つ「愛の隧道」は「寄り添はむ」心であり、それはやがて「疫なき世を共に叶え」ることが出来ることでもあるのですね。私も知らない物、分らない事に出会った時には一度立ち止まって「愛の隧道」を探ってみなければとの思いを深くしましたありがとうございます。なお邨は村の異称です。

春耕の鋤準備とのえ

親純 春

冬来たりなば春遠からじ。農機具を整え田起こしの準備万端です。やがて「疫なき世」を迎える準備は出来ております。との付けですね。

手合わす山にきみどりの風

静江 雑 【山類】

前句との付けは「共に叶えむ」との祈りを込めて山に手を合わせていると、その山にすがすがしい風が吹き亘っています。「疫なき世」はもうすぐそこまで来ています。との呼応ですね。「みどり」は夏の季語ですので「きみどり」は春の季語で採りたいところですが、いかんせんこればかりは無理のようです。

牛の頭につる長閑けさ

大輔 春 【動物】

子牛は生まれた時には角はまだ頭に生えていないようですが、ひと月に5ミリから8ミリ位づつ伸びていくそうです。「疫なき世」もゆっくりとではあるがやがて収まるでしょうとの付けですね。それにしても何ともユーモラスな掛詞でありますことか。牛の角が募るほどの緩やかさで「長閑けさ」つまりCOVID19の蔓延の終息が訪れるでしょうとは!!